

各 位

2023年4月19日
株式会社リットーミュージック

『必殺シリーズ秘史』から半年で早くも第2弾が登場！
『必殺シリーズ異聞 27人の回想録』が2023年4月21日に発売に。題字Tシャツも販売！



インプレスグループで音楽関連のメディア事業を手掛ける株式会社リットーミュージック（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：松本大輔）内で文芸・カルチャー関連を扱う出版レーベル立東舎は、『必殺シリーズ異聞 27人の回想録』（高鳥都 著）を、2023年4月21日に発売します。

金をもらって恨みをはらすアウトロー時代劇「必殺シリーズ」——その50周年を記念した書籍『必殺シリーズ秘史 50年目の告白録』に続く第2弾。刊行日の4月21日は、藤田まこと演じる中村主水初登場の『必殺仕置人』の初回放送からぴったり50年後となります。

前回未収録のプロデューサーから始まって再録ふくめた9人の脚本家を中心に題字、音楽、タイミング（色彩補正）など撮影所以外の関係者まで徹底取材。さらには現場を支えた京都映画（現・松竹撮影所）のスタッフ座談会や初期作を手がけた大熊邦也監督の独占インタビューも掲載。キャストは中尾ミエ、中村敦夫、火野正平と歴代シリーズを彩った3人が登場し、インタビューの名手・高鳥都がそれぞれの必殺人生を掘り起こす。まさに中村主水初登場の『必殺仕置人』50周年を飾るにふさわしい充実の内容でお届けいたします！

また今回は、『必殺仕置人』50周年を記念したTシャツと書籍のセット販売も期間限定で実現。糸見溪南先生筆の題字をあしらったTシャツは、表ver.と裏ver.の2種類が用意され、それぞれ「黒（文字赤）」「黒（文字白）」「白（文字黒）」を選べます。着てから読むか、読んでから着るか……『必殺仕置人』の50年。ぜひお楽しみください！

Tシャツ販売サイト「T-OD」 <https://t-od.jp/collections/shiokinin>

京都映画座談会 1

石原興（撮影） ＋ 園井弘一（編集）

本当はやっぱりかんことを
やっています



必殺シリーズの映倫を取り上げたカメラマンにして、現在は監督として活躍する石原興。すべてのシーンを驚いて再構築してきた編集の園井弘一。前作「必殺シリーズ秘史」に登場した大ベテランが「必殺仕置人」を語り合う。出演者や監督の思い出第1話「いのちを売ってさらし首」を鑑賞しながらの解説も！

近くまで近い俳優との距離

「1975年に始まった『必殺仕置人』の50周年をいこうって、藤田まことさんへの敬意を込めて、藤田まことさんへの敬意を込めて、藤田まことさんへの敬意を込めて……」

園井 藤田まことさんへの敬意を込めて、藤田まことさんへの敬意を込めて……

石原 まことさんへの敬意を込めて、まことさんへの敬意を込めて……

園井 まことさんへの敬意を込めて、まことさんへの敬意を込めて……

園井 まことさんへの敬意を込めて、まことさんへの敬意を込めて……

石原 まことさんへの敬意を込めて、まことさんへの敬意を込めて……

園井 まことさんへの敬意を込めて、まことさんへの敬意を込めて……

石原 まことさんへの敬意を込めて、まことさんへの敬意を込めて……

園井 まことさんへの敬意を込めて、まことさんへの敬意を込めて……

保利吉紀

「ホテルブラザ」から「かんのんホテル」へ 先発組との交流が始まった

脚本

保利 1975年の『必殺仕置人 悪徳下』まで80人以上のシナリオを手がけた保利吉紀。『かんのんホテル』は、必殺シリーズの先発組と交流が始まった。

「必殺」を書くことになった経緯には、ほとんどない。「幸運」がひそんでいる。脚本家デビューは昭和37年、芸楽社から編み上げた『空日』が導入し、NET（現在のテレビ朝日）で放送された。『空日』は500人以上の職種者を出した伊勢丹百貨取材し、田舎の責任の所在が空白であることと新たな作品。

そのシナリオが雑誌「テレビドラマ」に掲載された。これがその後の「幸運」の始まりで、たに気なへんを離れていく。前日放送制作部との面々による交渉が戦っていたのではない。

これだけでわたしの「偶然」に過ぎないが、年を離れて前相対年この「偶然」を運んできたのである。毎日放送から話がかかってきた。

「白」おもしろいから、すまんけど、これからすぐに大阪に帰ってほしいんや、伊丹空港で待つとから……」

声のなきはディレクターの松本明と「ヒゲ松さん」だった。ヒゲ松さんの要件は、いま取りかかっている三浦泰三郎作品「走れ龍ちゃん」の脚本が難解しているの直して伝ってほしい、という。

「おいおい、あんた正気かいな、ただの一本しか放送されてないのに、なんぞと云うのか、ま、編まれたら……」

……わたしは自分の身のまわりで田村から伊丹に……

……わたしは自分の身のまわりで田村から伊丹に……

……わたしは自分の身のまわりで田村から伊丹に……



中尾ミエ

必殺遊び人よ
とにかくみんなで遊んでたっていうか

『必殺必中仕事屋稼業』でお春を演じた中尾ミエは、その後『必殺仕事人』の歌、『新必殺仕事人』のおてい、それぞれ立ち位置の異なるキャラクターをパスタライタライたつぷりに演じてきた。いま歌手として、俳優として活躍する氏が振り返る、必殺シリーズの日々。同世代のスタッフとの意外な交友録も！

京都映画は敷地内に産荘があった。中尾「必殺」といえばね、もともと本に出る仕事でしただけ、それからもうわたしたちはこの世界に、まず付くあんなにスタッフ自身が丸となって作る番組ってほかにはない。ストーリーもよく手回ししようっていうと、スタッフが集まってきて、みんなでディスカッションする。あ、わしの出番がなくて少し空ま時間あると、たとえ石原（剛）さんがスタッフに「お前、いなくていいからミエちゃんの席の相手していいって、中尾さん、麻呂好きなんです」。

中尾 そうなんです。京都映画は敷地内に産荘があったから、いつはれもいろいろ番組でカラかったままだってなんです。スタッフがディスカッションして撮影が止まると、どうせ家に帰って来たら帰らないんだから、何時にならうか関係ない感じ、そもそも仕事に行ってるという意識がなかった、本当にアットホームな雰囲気だったんです。東映なんかだと、やっぱり大御所がいたらら影響者はよつと気を遣ったかもしれないけど、松竹では本当に好き勝手やってました。

中尾 まずはシリーズ第5弾『必殺必中仕事屋稼業』（75年）で、船形半蔵と演じる半衛の女房お春を演じています。こんなにかっこいい俳優さんはいませんよ、もうね、股をやってると、すくく愛しくってらうの。「あ、こんなにかっこいい人なのか……」って、お春した女優さんにはみんな形さんで惚れてたみたい、それはわかりませんが……なんに、本番が終わったら、「せんぜん半衛のおさんなんですけど、笑、演じてるときは本当になんか……なんだろう、愛おしいんです、憎悪ですけど、かわいいたいのか。」

その愛おしい感じが、夫婦のシーンにも出ています。

中尾 現場では「なんかおもしろいことさう」ってみんな言っていました。たとえはボーカになって江戸時代に

監修

大熊邦也

テレビはワンポイント
なにを見せるべきかを大事にしました

上司だった山内に仕掛人の話を持ちかけたんです

大熊 わたしは当時、朝日放送のディレクターとして局制作のドラマを演出していたんです。それから外部発注して松竹さんのほうで「必殺」をやることになって……テレビ局のスタジオドラマというのは限られた空間の中で、フィルムのように自由な撮影はできませんから、「必殺」は楽しかったし、局としてもいい力を入れてました。16ミリフィルムで撮るテレビ映画というのは映画監督が中心でしたから、わたしも「監督」として名前が出ますけど、やっぱりテレビの「ディレクター」という意識はありましたが、映画界の人間にはありませんから、だから今日の取材も監督ではなく、あくまでディレクターの話として聞いてください。

——よろしくお願ひします。

大熊 〇〇存期のようにある〇〇（木枯り放浪記（72）、73年）が非常にアツクなりました。その真裏で「必殺仕事人（72）、73年）がスタートしました。もともとは、テレビ局という自分たちの企画を立てて、それを演出するかたまで、はつきりプロデュースディレクター制という気持ちはなく、それが企画を伴った時代だったんです。山内久司とわたしのコンビもそうでした。

それで、新しく時代劇を注すのに、なんかええ企画ないかというところ、ちょうど1972年に池波正太郎さんの「殺し屋四人」という小説が出た、まだ本になってなくて、雑誌載っていたんです。わたしそれを読んだ、上司だった山内に仕掛人の話を持ちかけたんです。最初は「こんな企画を殺すような話、テレビでできるかって、けんもほろろ、えらい否定してたんです。ところがなぜか奇変してね（笑）、時代の流れで実現することになりました。そこ山内の手腕と政治力です。そういう縁があって自分の企画から始まったんですから、やはり演出してみたい気持ちはあったんです。

——大熊監督が製作を提案したのですか？ 朝日放送の山内久司、井原正太郎、仲川利久、村沢誠彦の各氏が監修に集まり、時代小説を読みあさって見つけたというのが経緯になっています。

大熊 公にはもうなつてませんし、まったく会社内の話ですから世の中には出てきませんが、実際のところはそうなんです。おそろく山内も「自分が見つけた」とは言っていないでしょう。僕じになつたら勝手な話をしていくわけではなく、ずっと「黙っておけよ」と言われていた話なんです。それから外注を決めるにあたって、東映でコンペをやりましたが、もう内々には松竹が決まっていたんじゃないですか。東映の企画書を見ましたけど、それで松竹さんに現場をお願いして、局からはわたしと松本明が監修として「仕掛人」に参加することになったわけですよ。



■書誌情報

書名：必殺シリーズ異聞 27人の回想録

著者：高鳥都

定価：2,750円（本体2,500円＋税10%）

発売日：2023年4月21日

発行：立東舎／発売：リットーミュージック

商品情報ページ <https://www.rittor-music.co.jp/product/detail/3123317409/>

【CONTENTS】

R-1

櫻井洋三（プロデューサー）

R-2

野上龍雄（脚本）

国弘威雄（脚本）

安倍徹郎（脚本）

石堂淑朗（脚本）

早坂暁（脚本）

村尾昭（脚本）

松原佳成（脚本）

保利吉紀（脚本）

田上雄（脚本）

R-3

糸見溪南（題字）

須佐見成（タイミング）

田中浩三（製作補）

南野梅雄（監督）

比呂公一（音楽担当）

R-4

中尾ミエ（俳優）

中村敦夫（俳優）

火野正平（俳優）

大熊邦也（監督）

京都映画座談会

石原興（撮影）＋園井弘一（編集）

野口多喜子（記録）＋高坂光幸（演出部）

林利夫（照明）＋中路豊隆（録音）＋都築一興（演出部）

COLUMN

富田由起子が語る、早坂暁と必殺シリーズの思い出

必殺シリーズ脚本家・監督列伝 1972～1979

IMAGE

現場スナップ集 1・2

『必殺仕置人』美術資料集

はじめに
おわりに
必殺シリーズ一覧

野上龍雄インタビュー
取材・文：春日太一

国弘威雄、安倍徹郎、石堂淑朗、村尾昭インタビュー
取材・文：坂井由人

高鳥都（たかとり・みやこ）

1980 年生まれ。2010 年よりライターとしての活動をスタートし、『映画秘宝』『昭和の謎 99』『昭和の不思議 101』などに執筆。著書に『必殺シリーズ秘史 50 年目の告白録』、編著に『別冊映画秘宝 90 年代狂い咲き V シネマ地獄』があり、『漫画+映画!』『完全版アナーキー日本映画史 1959-2016』ほか共著多数。

【立東舎】 <http://rittorsha.jp/>

立東舎は文芸、マンガほか、さまざまな分野のポップカルチャーを紹介する出版活動を展開中。「乙女の本棚」などの好評シリーズのほか、手塚治虫、谷ゆき子らの幻のマンガの復刻などで感度の高い読者の話題を集めている出版ブランドです。

【株式会社リットーミュージック】 <https://www.rittor-music.co.jp/>

『ギター・マガジン』『サウンド&レコーディング・マガジン』等の楽器演奏や音楽制作を行うプレイヤー&クリエイター向け専門雑誌、楽器教則本等の出版に加え、電子出版、映像・音源の配信等、音楽関連のメディア&コンテンツ事業を展開しています。新しく誕生した多目的スペース「御茶ノ水 RITTOR BASE」の運営のほか、国内最大級の楽器マーケットプレイス『デジマート』やエンタメ情報サイト『耳マン』、T シャツのオンデマンド販売サイト『T-OD』等の Web サービスも人気です。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社リットーミュージック 広報担当
E-mail: pr@rittor-music.co.jp